

# 容姿志向性と美容医療に対する態度との関連について

○中林颯希・古満伊里

(広島修道大学健康科学部心理学科)

## 目的

アピランスが注目される現代、青年期は特に容姿への関心が高まり、多くの若者が自分自身の容姿について劣等感を抱くようになる(島, 1998)。近年わが国でも美容医療が浸透し普及してきた。現代の若者にとって外見を整えることにどのような意味があるのだろうか。本研究では、美容医療に対する態度尺度を作成し、容姿志向性と美容医療に対する態度との関係を検討した。

## 方法

**調査参加者** Google Form により男性 43 名, 女性 158 名, 不明 1 名(平均年齢 = 21.45 歳,  $SD = 2.01$ ) の回答を収集した。

**調査内容** ①美容医療に対するイメージ尺度(予備調査により独自に作成), ②容姿志向性尺度(平野・井上, 2006), および③美容医療の経験の有無と施術希望の有無を問うた。

## 結果および考察

### I: 美容医療に対するイメージ尺度

予備調査で作成した尺度について探索的因子分析を行った結果、精神的充足感 ( $\alpha = .915$ ), 施術不安 ( $\alpha = .837$ ), 社会的受容 ( $\alpha = .770$ ), 社会的不利益 ( $\alpha = .782$ ) の 4 因子となった (Table 1)。

Table 1 美容医療イメージ尺度の因子分析

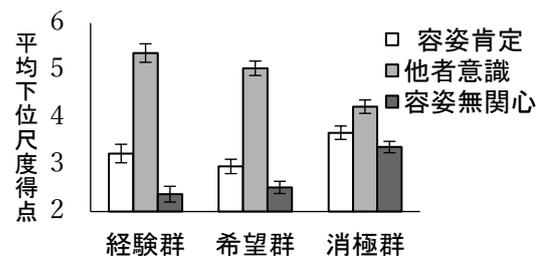
項目	精神的充足感	施術不安	社会的受容	社会的不利益	共通性
10 自尊心が高まる	.86	.03	-.02	-.03	-.73
7 自分の理想に近づける	.81	.09	-.01	-.02	.67
28 自己肯定感が上がる	.78	.10	-.01	-.11	.64
4 ポジティブな気分になれる	.77	-.19	-.08	.09	.54
6 精神状態が良くなる	.72	-.10	.01	.05	.52
16 コンプレックスの解消につながる	.70	-.02	-.20	.01	.39
2 自分に自信が持てる	.65	.06	.05	.04	.46
30 自己満足感を得ることができる	.62	.02	.02	.04	.40
9 向上心が高まる	.59	-.12	.18	.03	.48
18 第一印象が良くなる	.52	-.07	.36	-.04	.59
33 自分の生きやすい環境を整えることができる	.45	.14	.13	-.23	.34
20 コミュニケーションに積極的になれる	.41	-.02	.38	.15	.49
11 施術に対して不安がある	.14	.81	-.13	-.02	.66
1 経済的負担が大きい	-.17	.74	.08	-.12	.49
21 後遺症が心配である	-.15	.66	.17	.15	.59
3 施術が失敗する可能性がある	.06	.65	-.14	.00	.43
5 命にかかわるケースがある	-.08	.63	.05	-.10	.35
12 ガウンタイム(施術後)の腫れや痛みが辛そうだ	-.25	.61	-.03	.11	.53
15 施術後の状態を維持することが難しい	-.15	.40	.16	.21	.32
23 周囲からの評価が上がる	.09	.01	.75	-.07	.64
25 人から好意を持たれる	.05	.03	.74	.10	.64
13 第一印象が悪くなる	.31	-.02	.43	-.07	.41
24 将来的なパートナーに誤解がある	.02	-.07	.11	.69	.47
27 社会的に不利益が生じると思う	-.08	-.13	.04	.62	.35
31 不自然に見えてしまう	-.02	.03	-.21	.60	.39
29 顔から買った身体を傷つけることは出来ない	-.06	-.05	.01	.56	.30
14 以前の顔・身体を知っている人に会いづらくなる	-.01	.08	.07	.53	.35
26 美容整形に依存してしまい離れ運してしまう	-.03	.00	.07	.52	.29
32 一般的に広く受け入れられているわけではない	.16	.06	-.10	.45	.23
8 周囲の人から偏見を持たれる	.06	.25	-.07	.44	.35
因子荷重	6.65	3.87	3.83	3.53	

また容姿志向性尺度の探索的因子分析結果は、容姿肯定 ( $\alpha = .924$ ), 他者意識 ( $\alpha = .872$ ), 容姿無関心 ( $\alpha = .852$ ) の 3 因子構造となった。

### II: 美容医療への態度と容姿志向性との関係

美容医療の経験の有無と施術希望の有無に関する回答から、参加者を美容医療経験群, 希望群, 消極群に分けた。容姿志向性尺度 3 因子の下位尺度得点について、群 (3) × 志向性因子 (3) の 2 要因混合分散分析を実施した結果、群の主効果 ( $F(2, 198) = 4.09, p < .05$ ), 容姿志向性因子の主効果 ( $F(2, 396) = 112.70, p < .01$ ) および群と容姿志向性因子の交互作用 ( $F(4, 396) = 13.34, p < .01$ ) が有意であった。美容医療経験群・希望群は、消極群に比して他者意識得点が高く、自分の容姿を否定的にとらえている。

Figure 1 美容医療経験と容姿志向性との関係



次に本研究で作成した美容医療イメージ尺度の 4 下位尺度得点について、美容医療経験に関する 3 群間で比較するために 2 要因混合分散分析を実施した (Fig. 2)。その結果、「精神的充足感」と「社会的不利益」因子の尺度得点に有意な群間差が認められた (それぞれ,  $F(2, 198) = 6.26, p < .01$ ,  $F(2, 198) = 6.95, p < .01$ )。美容医療経験群と医療希望群は、美容医療消極群に比較して「精神的充足感」を美容医療に求めており、「第一印象をよくする」ための道具であるといった認識が美容医療の動機づけになっているわけではなかった。また、美容医療消極群は、美容医療によってもたらされる可能性がある種々の不利益を重視していた。

Figure 2 美容医療経験と美容医療イメージとの関係

